

# 西ドイツにおける米国カリキュラム研究の 受容に関する一考察

— 1970年代を中心に —

樋口 裕介

(2007年10月4日受理)

A Consideration about Acceptance of the American Curriculum Studies in West Germany  
— Centering on 1970's —

Yusuke Higuchi

**Abstract.** The purpose of this paper is to concentrate the acceptance of the American curriculum studies, picking up in 1970s West German, and to consider how the American curriculum studies are realized comparing the German traditional „Lehrplan“ studies. Until the 19th century, the „Lehrplan“ studies, based on didactics, have been lead in curriculum studies. In the 20th century, the American curriculum studies rised, and the American curriculum studies lead today. The „Lehrplan“ studies, based on European traditional didactics, and the American curriculum studies are regarded as two basic model in present curriculum studies. Since 1990s, the comparison aiming the partnership of this two basic models is picking up. Based on these things, in this paper I regard 1970s when empirical curriculum studies pick up in West Germany as the clue to consider the exchange of this two basic models.

Key words: curriculum, „Lehrplan“, didactics

キーワード：カリキュラム，レールプラン，教授学

## I. 研究の目的

本研究は、1970年代から活発になった西ドイツにおける米国のカリキュラム研究の受容に目を向けて、ドイツ伝統のレールプラン (Lehrplan) 研究に照らして、米国のカリキュラム研究がどのようにとらえられうるかを検討することを目的としている。

19世紀までカリキュラム研究において主導的立場にあったのは教授学にもとづいたレールプラン研究であった。20世紀に入ってからは米国のカリキュラム研究が台頭し、21世紀の今日においては米国のカリキュラム研究が主導的立場にある。それでは、20世紀までカリキュラム研究をリードしてきたレールプラン研究

は今日のカリキュラム研究においてどのような意義を持つのだろうか。ヨーロッパ大陸に伝統的な教授学にもとづくレールプランと、アングロサクソンのカリキュラムとは、今日のカリキュラムの「二つの基本モデル」とされ、特に1990年代以降この「二つの基本モデル」の国境を越えた共同を目指した体系的な比較が活発になされている<sup>1)</sup>。このような問題関心から、本稿では、西ドイツにおいて経験科学的なカリキュラム研究が盛んに行われた1970年代を、今日においても比較されるヨーロッパ伝統の教授学にもとづくレールプラン研究とアングロサクソンのカリキュラム研究との交流のドイツにおける端緒と見なして、1970年代西ドイツのカリキュラム研究を検討する。

1967年のロビンズーン (Robinsohn, S. B.) の『カリキュラム改訂としての教育改革』を契機として、特に1970年代に入ってから西ドイツにおいては、「ある包括的な教授目的のための教授財の選択と配列」<sup>2)</sup>とされるような内容を重視して構成されるルールプラン研究を克服するものとして経験科学的なカリキュラム研究が盛んになった。この1970年代の様々な研究グループのカリキュラム研究は、的場正美氏によって概観されている<sup>3)</sup>。

本稿においては、「カリキュラム」という概念と伝統的なドイツ教授学の「ルールプラン」という概念の関係がどのようにとらえられたか、そして、1970年代の西ドイツのカリキュラム研究について、伝統的なドイツ教授学はどのように評価されたかについて明らかにしたい。

## II. 「カリキュラム」と「ルールプラン」との関係

1970年代の西ドイツにおける様々なカリキュラム研究については、のちにフライ (Frey, K.) やハーマイヤー (Hameyer, U.) らが、独自の観点からとらえ直しおこなっている。以下では、フライやハーマイヤーらのカリキュラム概念の整理を手がかりとして、1970年代西ドイツのカリキュラム研究が、伝統的なルールプラン研究に照らしてどのようにとらえられたのかを検討したい。

### (1) カリキュラムの二つのアスペクト

フライは、カリキュラムを学習成果としてとらえたうえで、学習成果は、学習内容だけではなく、様々な要素が影響を与える過程であるととらえている。つまり、フライによれば、「カリキュラムは過程であるということを全体として意味する」のである<sup>4)</sup>。

フライ自身はこのようにカリキュラムを過程としてとらえながら、それまでの様々なカリキュラム研究を二つのアスペクトからとらえ直して整理している。

#### ①テーマのアスペクト

カリキュラムという過程の途中のある状況を規定する際にルールプラン (Lehrpläne) が生じるという<sup>5)</sup>。このルールプランは、いわゆる様々なレベルでの教授計画のうちの体系的に編纂されたものを指す。このルールプランの立案の際に、「学校の教育は、どのような目標、どのような教科、どのような学習組織の形態を追求すべきか」という問いに関係するイメージが必要であるという<sup>6)</sup>。このイメージは、すなわち「何が教育であり、何が教育であるべきか」を考えること

になり、それにもとづいて個々の教科、もしくはカリキュラム全体についての像がつくられる。つまり、カリキュラムは、教育の問いをテーマ的に扱う、ととらえられるのである<sup>7)</sup>。

#### ②過程のアスペクト

フライは、もう一つのアスペクトとして過程のアスペクトからカリキュラムを検討している。過程のアスペクトにおいて一般的に言われることは、学習の過程のなかで、子どもは、ルールプランの実施方法などの様々な影響を受けて学習成果に到達するということであり、カリキュラムは、このような過程としてとらえられる必要があるということである。

フライは、テーマと過程の二つのアスペクトが、多様に相互作用し合っているため、二つのアスペクトはどちらも考慮されるべきであるとする<sup>8)</sup>。この二つのアスペクトを考慮すると、カリキュラムの根本問題は、次のようにとらえられるという。

社会的、現実的な環境ならびに学習者の個々の自己理解の地平において根拠があり、同時に、目指された学習過程の前、そのなか、そのあとで、あらゆる参加者の才能を保証するような学習状況がどのように開発され、実現され、評価されるか<sup>9)</sup>。

このように、カリキュラムについての根本問題は、学習者をめぐる様々な要素を考慮し、目標に向けられた学習状況の開発、実現、評価の一連の過程としてとらえられるという。

### (2) カリキュラム研究におけるテーマのアスペクトと過程のアスペクト

フライは、上述した二つのアスペクトから、古典的な教授学理論にもとづいたルールプラン研究をはじめとして、ロビンズーン以来展開された様々なカリキュラム研究を整理した。

#### ①古典的なドイツ教授学

フライによれば、古典的なドイツ教授学は、陶冶内容の構造化やその陶冶価値に傾注して、ルールプラン研究をおこなった。彼らの手法は、教授・学習過程を教師と生徒の精神的出会いとしてとらえて解釈学的方法に基づいている<sup>10)</sup>。

#### ②ロビンズーンのカリキュラム研究

フライは、ロビンズーンに端を発するカリキュラム研究について次のように述べている。

ロビンズーンと彼の共同研究者は、1967年に「カリキュラム」として説明されるアプローチによって、かつての教授学的なアプローチとは対照的に、上で紹介された過程の側面を考慮する。学習過程の、選択、決定、解明、評価のやり方が、カリキュ

ラム理論の中心にある。全体としては、三つの領域が、カリキュラムの領域に入る。それは、基準の調査、ふさわしい方法的なやり方の構成、このやり方が関係する担当部局の規定である<sup>11)</sup>。

### ③ブランケルツのカリキュラム研究

フライは、ブランケルツ (Blankertz, H.) ら、ミュンスターグループのカリキュラム研究をロビンゾーンのカリキュラム研究とは相対的に描いた。ロビンゾーンのアプローチにおいては、個々の教科や学習領域に至るためにカリキュラム全体が取り扱われなければならないが、それに対して、ミュンスターグループの研究者は、現実的な視点から、カリキュラム全体の改訂ではなく、教科と関わった改訂を要求した<sup>12)</sup>。「個々の著者もしくはグループによって、社会的な目標もしくは基本概念の助けでもって構造化され、格子 (教授学的構造格子) に発展させられる学習領域 (例えば、外国語や政治といった個々の教科) が、出発点を形成する。この構造格子は、起こりうる第二、第三の段階、すなわちレールプラン開発もしくは具体的な授業準備のための基礎を形作る。」<sup>13)</sup> という。ミュンスターグループの試みは、ロビンゾーンが徹底してカリキュラムの全面改訂を目指すのに対して、より現実的な視点から、教科教授学的なテーマ化をおこない、教授学的構造格子にもとづいて学習領域を規定する点において、古典的な教授学につながるという<sup>14)</sup>。その点では、彼らのカリキュラム論は、過程のアスペクトだけが強調されたものではなく、テーマのアスペクトも含み込まれていると考えられる。

### ④フライ・フレクシッヒのカリキュラム研究

フライは、自身のカリキュラム研究や、LOT (Lernziel-Orientierte-Test) プロジェクトのフレクシッヒ (Flechsig, K. H.) の試みについても言及している。それによれば、フライやフレクシッヒの研究は、「本質的に、人間が、カリキュラムの枠組みの中で、固有の目標やコンピテンツの提供を通して、相互作用のなかで、学習状況を生み出し、実現し、評価するような過程として、カリキュラムの領域を理解する」<sup>15)</sup> ものである。

フライの視点であるテーマのアスペクト、過程のアスペクトから、いくつかの代表的なカリキュラム構成論を大別すると、古典的教授学はテーマのアスペクトにもとづいたカリキュラム研究として、ロビンゾーン、ミュンスターグループ、フライ、フレクシッヒらの研究は、過程のアスペクトを強調したカリキュラム研究として位置づけられる。

このように見ると、1970年代から盛んにおこなわれた西ドイツにおけるカリキュラム研究は、テーマのア

スペクトに主眼を置く教授学にもとづいたレールプラン研究が伝統的であった西ドイツにおける、過程のアスペクトの受容としてとらえられうる。

### (3) 狭義のカリキュラムと広義のカリキュラム

フライのようなとらえ方は、1970年からの「カリキュラム研究の総括」<sup>16)</sup>を目的として1983年に出版されたハーマイヤーらの『カリキュラム研究ハンドブック 1970年～1981年の研究の概観』にも見られる。

同書においてハーマイヤーらは、カリキュラムを狭義と広義の二つに区分して理解している。

狭義には、授業準備、すなわち意図された学習過程の構造化をねらいとした教授計画もしくはそのほかの計画された行為のまとまりが、カリキュラムという語のもとでは理解される。それゆえ、カリキュラムは、計画された、多かれ少なかれ組織化された学習過程のための計画である<sup>17)</sup>。

このように、狭義のカリキュラムは、計画という性格の強いものとしてとらえられる。

その一方で、広義のカリキュラムは次のようにとらえられている。

より包括的なカリキュラム理解は、カリキュラムの成立の観点も含む。… [中略] …カリキュラムという語のもと、過程や条件がテーマ化される。それは、展開される授業計画や、教授行為、もしくは方針、学習過程のなかで使用される (べき) メディアを導くような過程や条件である。この解釈につづいて、カリキュラムは、計画された学習成果の構造化のための最初の計画段階に取り組み、学習過程と新しいカリキュラムシステム使用の影響の分析の評価にまで導く<sup>18)</sup>。

このような広義のカリキュラム理解のもとでは、伝統的な教授学の問題提起と比べて、陶冶対象が拡大されるという<sup>19)</sup>。「陶冶過程や、カリキュラム特有の展開過程が、社会的な関係のなかで、組み入れられ、構成される。社会化や陶冶の成立 (陶冶過程の文化的、社会的埋め込みも) が、強調され、テーマ化され、調査される—教授学理論においては、学習対象の陶冶内容の学習意味の論究が支配的であったため、そのような考慮は手つかずのままであった」<sup>20)</sup>。つまり、従来の教授学理論において陶冶内容の意味の論究が支配的であったのに対して、広義のカリキュラム理解のもとでは、社会的な関係・前提のなかの陶冶過程が考察されるのである。

カリキュラム研究において、陶冶現象は、それが社会的相互作用の文脈の中で観察されるということによって、あらためて強調される。陶冶の根拠、

陶冶の正当性は、陶冶対象との取り組みからのみ生じるのではなく、それは、陶冶過程やその過程への影響の構造化の体系を必要とする<sup>21)</sup>。

すなわち、子どもが陶冶されたかどうかというのは、陶冶対象を獲得したかどうかによってのみ判断されるのではなく、陶冶過程や、陶冶過程への影響にまで目を向けなくてはならないというのである。

1970年代に展開されたカリキュラム研究の総括における、狭義と広義のカリキュラムのとらえ方からは以下のようなことがわかる。それは、ドイツ伝統の、陶冶内容の意味の研究が支配的であった教授学にはなかったような、カリキュラムを学習過程全体としてとらえ、学習過程に影響を与える様々な条件や前提を考慮するカリキュラム研究が、1970年代の西ドイツにおいて展開されたということである。フライの二つのアスペクトと結びつけるならば、狭義のカリキュラムをテーマのアスペクトにもとづく教授学・レールプラン研究、広義のカリキュラムを過程のアスペクトをも含んだカリキュラム研究ととらえることができる。つまり、西ドイツにおけるカリキュラム研究の受容は、狭義のカリキュラム理解にもとづいた教授学が支配的であったドイツにおける、広義のカリキュラム理解の受容として理解されるのである。

#### IV. 西ドイツにおけるカリキュラム研究の受容に対するメンクの要求

1970年代に、西ドイツにおいてカリキュラム研究が受容されたという一般的な見解に対するアンチテーゼとして1987年のメンク (Menck, P.) の論文「ロビンゾーン以降のレールプラン開発」を取り上げる。メンクは、1983年にすでに、「レールプラン改革とその理論」というテーマのもと、ヴェーニガー (Weniger, E.) のレールプラン理論を超えるような、レールプランやカリキュラムの開発の実践、学校におけるその構造や機能を概念的にとらえることを可能にする理論があるかどうかを問い、その問いを否定したという<sup>22)</sup>。その際メンクが主張したのは、「カリキュラム議論が、レールプラン理論には、深い足跡を残さなかった」ということである。1987年において彼は、ロビンゾーンの論文によって引き起こされたカリキュラム議論が、レールプラン開発の実践に認識可能なほど影響を与えたかどうかを問うている<sup>23)</sup>。

##### (1) メンクの研究の前提

メンクは、レールプラン開発の実践に関心を持ち、考察をおこなっている<sup>24)</sup>。その際、ロビンゾーン以来

のカリキュラム研究に対するメンクの主張は、それらのカリキュラム研究と陶冶理論的な立場とが、レールプランの内容の開発に関しても、適切に交わるべきであるというものである。

私が主張するのは、私が陶冶理論的な概念性のなかで言い表すことが、あらゆる相違にもかかわらず、その中心は、(ロビンゾーンが1967年に主張した)「生活状況の克服」ならびに、そのために不可欠な「資格」を備えていることと同一だということである<sup>25)</sup>。

つまり、メンク自身が陶冶理論的な考えにもとづいて主張することは、ロビンゾーンが主張するような「生活状況の克服」やそのための「資格」といったことと同じだということである。

メンクは、このような前提にもとづいて、次のような問題意識を持つ。それは、ロビンゾーンの研究においては、教育手段や授業方法が反省的な経験に基づいて選択され、発展させられているものの、合理的な根拠や客観的な認識にもとづく陶冶内容の選択と優先についての決定の正当性については述べられていないという問題意識である<sup>26)</sup>。カリキュラム内容の選択についても説明可能で、根拠があるというような事実が、カリキュラム開発の事実的なプロセスにおいてはみられないというのが、メンクの経験的な主張である<sup>27)</sup>。

このように、カリキュラム開発の実践においては、カリキュラム内容についての合理的な説明がつかないような取り組みしかなされなかったとメンクは指摘する。このメンクの考察は、二つのアンケート調査を参照しておこなわれた。それは、LOTプロジェクトにたずさわったコンスタンツの研究グループのハラー (Haller, H. -D.) が、レールプラン委員会の活動プロセスに関心を持って、レールプラン委員会の構成員に対して1973年におこなったアンケートと、キール大学自然科学教育研究所のフライとハフト (Haft, H.) が1984/1985年におこなったアンケートである。

##### (2) アンケート調査にもとづくメンクの考察

メンクは、上述のような問題意識から、レールプランの開発を、レールプランの内容に焦点化した立場に立ちながら、「レールプランの開発の実践が、1970年から1984年にかけて変化しなかった」<sup>28)</sup>という仮説を、アンケート調査にもとづいて検証した。

###### ①開発の自律性

メンクは、表1, 2, 3から、レールプラン委員会の構成員が特に実践にたずさわって (表1)、主に指導的な立場を占めているということ (表2)、レールプラン委員会の構成員の半分以上が教科書や教材をつ



くった経験を有するということ（表3）を読み取り<sup>29)</sup>、自律的に研究活動をおこなうことのできる機関であったことを示した。このことに加えて、ルールプランの開発のためのイニシアチブが、文化省ではなく、多くの場合、教師や組合に与えられていたというハラーの報告を手がかりにして、ルールプラン委員会の研究活動が、国や州からは自律しておこなわれていたという結論にいたった。

## ②内容選択の基準

①の結論を前提として、メンクは「内容の選択に関して、どのような資料からルールプラン委員会の構成員が彼らの研究の際に判断するか、もしくは、内容の選択に際して彼らがどのような基準に方向づけられるか」<sup>30)</sup>を考察している（表4、5）。

まず、彼らが定期的に読んでいる雑誌は、教科教授学的な雑誌が圧倒的に多いということ（表5）<sup>31)</sup>、研究の際に助言者として助言を求められた人々は、専門科学者、教科教授学者、教育科学者、教授学者であったということ（表4）<sup>32)</sup>が明らかになる。そのほかに、被質問者が、研究のさいに用いたものとしては、若干の授業経験が最も重要である<sup>33)</sup>。また、授業目標や授業内容の決定の際の論拠としては、政策的、法律的なものよりも、教育学的なもの、教科に関するもの、実践的なものに重点が置かれていることがわかる。以上のことから、メンクは、「内容の選択のさいに重要なのは一論拠や基準に関して一、一方で学校や学校での若干の経験であり、他方で教科教授学（専門科学）である」<sup>34)</sup>と結論づける。このことは、ルールプランの内容決定については、政策や法律の介入は少なく、専門科学、教育学、実践といったものが重要性をもつということを示している。

メンクは、アンケートの結果から、ルールプラン委員会のカリキュラム開発が、自律性のなかでおこなわれていたという点、ルールプラン委員会の構成員のルールプラン開発のツールは、一般教授学や教科教授学、もしくは彼らの経験であったという点から、ルールプランの内容の開発には科学的に規定されるような変化がなかったとまとめている<sup>35)</sup>。すなわち、ロビンズン以来のカリキュラム研究は、カリキュラム開発の環境面の変化を促したにとどまっておき、ルールプランを開発するルールプラン委員会の内容決定にまでは深く影響を及ぼさなかったという考察である。ただし、メンクにとって、結局カリキュラム研究が教科教授学との結びつきを強めたものの、ルールプランの内容の開発という点では古典的な教授学におけるルールプラン研究とほとんど変わらなかったということは不本意であったと言える。メンクは、その後、陶冶理論

的な研究と経験科学的な研究との接点を検討する試みをおこなっている<sup>36)</sup>。

表1：ルールプラン委員会の構成員の主な活動

活動	数	%
授業	401	64
管理	47	8
教員養成	38	6
授業と管理	34	5
授業と教員養成	21	3
研究と講義	13	2
学校教育の管理	8	1
教員継続教育	8	1
協議	7	1
その他	39	6
無回答	9	1

表2：ルールプラン委員会の構成員の職業的地位

地位	数	%
校長	143	23
大学のゼミの指導者	23	4
学校管理	24	4
専門の指導者—学校	164	26
専門の指導者—ゼミ	61	10
専門の指導者—国家機関、 学校監査	33	5
教師	139	22
大学の教員	20	3
その他、無回答	18	3

表3：ルールプラン委員会の構成員の著作活動

著者・共同著者	数	%
(1) 教科書	129	21
(2) その他の授業の素材	217	35
(3) 教材	201	32
(4) 学問的な書物	78	13
(5) 雑誌論文	199	32
(1) + (2)	277	44
(1) + (2) + (3)	351	56

## V. まとめと今後の課題

本研究においては、1970年代における西ドイツのカリキュラム研究の展開が、陶冶目標設定と陶冶内容の構造化に焦点を当てていた伝統的な教授学にもとづいたルールプラン研究における、経験科学的なカリキュラム研究の受容としてとらえられるということが、フライによるテーマのアスペクトと過程のアスペクトと

表4：委員会の活動について相談されたコンサルタント

コンサルタント	1970年		1984年	
	「意見を聞く」		定期的に関与	時々に関与 関与しない
教科の講師・教授	54,2		7,4	17,4
教育科学者／教育学者	*		2,2	14,4
心理学者	15,4		0	1,9
社会学者	11,0		0	0,6
政党の教育政策者	4,7		0	0,6
労働組合の代表	3,7		0,5	1,1
教会の代表	6,1		1,9	4,5
教員組合の代表	24,1		0,6	2,1
親の組合の代表	5,3		1,0	1,8
生徒団体の代表	3,2		0	0,8
職業組合の代表	12,0		0,6	2,4
経済団体の代表	*		0	1,0
他のルールプラン委員会の 構成員	*		0,8	3,2
教科の担当者	*		0,8	2,4
その委員会に属さない, 文部省／学校監査の代表者	*		0,5	3,8
その委員会に属さない 教師	*		0,2	3,4
その他	14,0		1,8	5,1

表5：ルールプラン委員会の基盤としての要素

要素	1970		1984	
	数	%	数	%
他の州からのルールプラン	150	30	492	79
以前のルールプラン	137	28	488	78
エキスパートの判断	86	17	181	29
専門科学的な文献	94	19		
教科教授学的な文献	115	23	484	77
一般教授学的な文献	66	13		
学習心理学的、発達心理学的 な文献	48	10		
社会学的な文献	33	7		
教科書	-	-	391	63
古いルールプランについての 経験報告	-	-	280	45
その他	84	17	84	13
資料なし もしくは 報告なし	38	8	16	3

いう関係のなかで、そしてハーマイヤーによる狭義のカリキュラムと広義のカリキュラムという関係のなかで明らかになった。

ところが、ロビンズン以来のカリキュラム研究は環境面の変化を引き起こしたにすぎず、ルールプランの内容の開発に関してみれば、古典的な教授学におけるものほとんど変わらないというような見解も見られる。メンクが、ルールプラン開発における教授内容決定の判断基準に対しては、米国的なカリキュラム研究の受容が大きな変化をもたらさなかったと結論づけたことは、狭義のカリキュラム研究が支配的であったドイツにおける広義のカリキュラム研究の受容という

図式として描かれてきた1970年代のカリキュラム研究の状況をとらえなおす一つの示唆となりうる。

ただし、メンクの考察は、ルールプラン委員会の構成員のアンケート調査に基づいたものであって、実際に開発するプロセスにたずさわったわけではないうえに、開発されたルールプランにまでは目を向けていないことから、その実証性については疑問が残る。また、カリキュラムの内容決定の際に教授学や教科教授学、および自身の経験に依拠しているというのが、メンクがカリキュラムの内容開発という点では経験科学的なカリキュラム研究が影響を与えなかったととらえる根拠であるが、内容決定の際にその決定にたずさわる者が、最終的には主観的な判断をするというのは当然のことであり、このメンクの指摘の妥当性についても疑問は残る。むしろ、ルールプラン研究が主流であった西ドイツにおけるカリキュラム研究の受容を、経験科学的なカリキュラム構成手続きの取り入れととらえて、カリキュラム研究がどのような点で経験科学的な手続きをふまえた上で、カリキュラムをつくり出そうとしていたのか、それが伝統的なルールプラン研究の構成と、どのように異なるのかを検討し、カリキュラム構成手続きとして、どのような影響を与えたのかを考察することが今後の課題となる。

さらに、メンクがカリキュラム研究の受容が内容決定に影響を及ぼさなかったという指摘をしたうえでルールプラン研究と経験科学的なカリキュラム研究とが、構成手続きにおいてだけでなく、内容決定にた

ずさわる者の判断基準においても接点を持つべきことを求めたと考えるならば、この点についても今後検討する必要がある。

## 【註】

1) Vgl., Gundem, B. B./ Hopmann, S.: Didaktik Meets Curriculum. In: Gundem, B. B./ Hopmann, S. (Hrsg.): *Didaktik and/or curriculum*. Peter Lang Publishing, Inc., New York, 2002, S. 1.

2) Dolch, J.: *Lehrplan des Abendlandes*. Aloys Henn Verlag, Ratingen, 1959, S. 13.

3) 的場氏によれば、ラテン語で期間、経過を意味する „Curriculum“ という語はドイツではバロック時代に定着し、その後 „Lehrplan“ のようなプランという語に取って代わられたが、アングロサクソン系の諸国で保持され、その後、再びアングロサクソン系の諸国、特にアメリカから再び西ドイツの教育学へと帰ってきた。その際、重要な役割を担ったのがロビンゾーンであったという。ロビンゾーンが1967年に発表した『カリキュラム改訂としての教育改革』が、「ドイツ連邦共和国のカリキュラム論争の発端を開いた」とされている。的場氏によって、ロビンゾーン以降展開されたカリキュラム構成論のうち、代表的なものが以下のように整理されている。

- ・ベルリンググループ（ロビンゾーンら）のカリキュラム構成論
- ・LOT プロジェクト（フレクシッヒ（Flehsig, K. H.）ら）のカリキュラム構成論
- ・ヘンティヒ（Hentig, H.）のカリキュラム構成論
- ・ギール（Giel, K.）とヒラー（Hiller, G. G.）のカリキュラム構成論
- ・フライのカリキュラム構成論
- ・ミュンスターグループ（ブランケルツ（Blankerz, H.）ら）のカリキュラム構成論

代表的なカリキュラム論を整理すると、(a) アメリカのカリキュラム研究の影響を強く受けて経験科学的なアプローチから研究を進めるスイスのフライ、やはり経験科学的アプローチで、しかし、学校規模で実験を行ったヘンティヒ、(b) ブルームの影響を受けてタキソノミーを手掛かりにカリキュラムを展開するメラー、と教育工学とカリキュラム研究を結合して、決定過程としてカリキュラムを考えるフレヒツィヒ、(c) 状況分析をカリキュラム構成の出発点とするロビンゾーン、(d) 授業モデルからカリキュラムを構成するギールとヒラーと、簡単にまとめることができる。(的場正美『西ドイツのカリ

キュラム開発と授業設計』勁草書房、1987年参照。)

4) Vgl., Frey, K.: Curriculum-Lehrplan. In: Roth, L. (ed.): *Handlexikon zur Didaktik der Schulfächer*. Ehrenwirth Verlag, München 1980, S. 44.

5) Vgl., ebenda.

6) Vgl., ebenda.

7) Vgl., ebenda. 傍点部分は、原文中イタリック。以下、同様。

8) Vgl., ebenda, S. 44f.

9) Ebenda.

10) Vgl., ebenda.

11) Ebenda.

12) Vgl., ebenda, S. 46.

13) Ebenda.

14) Vgl., ebenda.

15) Ebenda.

16) Hameyer, U./ Frey, K./ Haft, H.: *Handbuch der Curriculumforschung. Übersichten zur Forschung 1970-1981*. Beltz Verlag, Weinheim und Basel, 1983, S. 11.

17) Ebenda, S. 21.

18) Ebenda.

19) Vgl., ebenda.

20) Ebenda, S. 22.

21) Ebenda.

22) Menck, P.: Lehrplanentwicklung nach Robinsohn. Beobachtungen aus Anlaß einer Befragung. In: *Zeitschrift für Pädagogik*, 33. Jahrgang 1987, Heft 3, S. 363.

23) Vgl., ebenda.

24) Vgl., ebenda, S. 364.

25) Ebenda, S. 364f.

26) Vgl., ebenda, S. 365f.

27) Vgl., ebenda, S. 366.

28) Ebenda.

29) Vgl., ebenda, S. 367.

30) Ebenda, S. 374.

31) Vgl., ebenda.

32) Vgl., ebenda.

33) Vgl., ebenda, S. 375.

34) Ebenda.

35) Vgl., ebenda.

36) Menck, P.: Anmerkungen zum Begriff der „Didaktik“ in Deutschland. In: *Zeitschrift für Pädagogik*, 1995, Beiheft 33.

(主任指導教員 中野和光)